

とよはしの
シチズンシップ

—
ショートエッセイ
—

2018-2019

目次

ええじゃないか、豊橋だもの

爆竹の音は豊橋の音？

豊橋カレーうどん

まちを歌う

新・城下町づくりは 夢か 幻か

豊橋筆メモリー

「アカウミガメとの出会い」

甘党トキワと裸の交流

つれづれなるままに、豊橋のいいところを考えていたら、妙におかしな気分になってきた。

「お互いさま」で支えあえる町になるといいな

母の働くところ

ステアレース

夜の豊橋散歩

『どうやら、豊橋の夜が活気を取り戻しつつあるようですねえ〜♪』

路地

ええじゃないか、豊橋だもの

山下 智江子

豪雪地帯の力士は辛抱強いと言われるが、私に辛抱が足りないのは豊橋のような温暖な気候のもとで育ったせいなのかもしれない。なんか中途半端なところも、もしかしたら豊橋の土地柄がなせるわざなのか、と自分の性格の弱さを豊橋のせいに行っている。

豊橋というところは結構便利な街だと思う。

山も海も川も、豊かな自然があるが交通の便は良い方だ。そこそこの買物ができる商業施設がある。治安も安定していて、物価も安い方ではないだろうか。大きい動物園や公共施設もあるが、ちょっと足を伸ばせばレジャーには事欠かない。行政の手続きにそんなに困ったことはない。

平成30年の秋は台風が上陸したり、竜巻が起こったりしてとにかく風が強いのは困りものだが、ネイティブ豊橋の私は豊橋のいいところをいっぱい言える。住みやすい街として自慢できる。

ただインパクトに欠けるといいうか、全国的に見た知名度は高くはないのかもしれない。県外の人にひとこと豊橋を紹介してと言われたとき「ちくわ」しか、とつさに思い浮かばなかった。

ちゃんと歴史を紐解けば「ええじゃないか」という社会現象が豊橋で端を発したとか、ほかにも東海道の吉田宿、吉田城址、手筒花火、路面電車、新幹線の豊橋駅、農業生産量が全国でもトップクラスといった「豊橋紹介」はできるのだが、熱を込めてアピールするの何だかね、といった奥ゆかしいというより、何でもあるけど何にもないんだよねと自虐的に言ってしまうところがある。

こんな中途半端な豊橋紹介しかできないのかと言われても、どこ吹く風、全然気にしない。だって風当たりが強いのは生まれつき慣れているから。

ええじゃないか、豊橋だもの。

爆竹の音は豊橋の音？

柿本 容子

「お祭りの時の爆竹って、この辺りの地域独特のものらしいですね。」

「えっ、そうなんですか?!」

知らなかった……。

秋晴れの下、朝から至るところで聞こえるあの爆竹の騒がしい音はお祭りには当たり前なものだと思っていた。

「子ども達が花火用の線香持ってねえ。」

「そうそう、箱ごと一気に火をつけたりしてねえ。」

「そうそう、次の日の掃除が大変でねえ。」

「あの音、ペットが怖がるんだよねえ。」

そして盛り上がる“爆竹あるある”。

豊橋といえば「手筒花火発祥の地」。

手筒花火は豊橋市民の自慢と言っても過言じゃないと思う。

豊橋の花火の歴史は、江戸時代に徳川家康公が三河

衆に火薬の製造を任せたことで発展に繋がったとも言われている。

それが東三河のお祭りに鳴らす爆竹とも関係しているのだろうか、なんとなく想像できるのだけれど、いつから始まったのか、なぜ始まったのか、残念ながらはっきりとしたことはわからなかった。

それにしても、当たり前だと思っていたものが地域独特の文化であるとわかった途端にちよつとわくわくしてしまうのはなぜだろう？

きっとそこにある歴史と今の私たちを繋ぐ“線”が見えてくるからなんじゃないかしら。

そんなことを思ったら、これまでよりも少しあの騒がしい怒涛の破裂音に愛着が湧いてしまった。



豊橋カレーうどん

谷 亜由子

故郷とは、忘れた頃にふらりと気まぐれに戻って来る娘をいつも変わらない温かさで包み込み、好物を用意して待っていてくれる母のような存在。

離れて暮らして30年という年月が過ぎてしまったが、私にとつての豊橋は、慣れ親しんだ、まさに実家のようなまち。

見慣れた町並み、懐かしい豊橋弁。隅から隅まで何でも知り尽くしたわが故郷。名物といったら、そう、誰もが知ってる「昔も今も変わらぬウマさ」でおなじみヤマサのちくわ！

ところが近年、「豊橋カレーうどん」なるものが台頭し、豊橋を代表する名物として長年不動の地位を誇ってきたちくわでさえ、その王座を奪われかねない勢いなのだという。

「実家、豊橋なんですか?! あの！カレーうどんの！」

「今度、仕事で豊橋行くんですよ。やっぱランチはカレーうどんですよねー。オススメのお店教えてくださいよ！」

確かに、最近まわりの人々も私の出身が豊橋だと知るや否や、カレーうどんの話題を持ち出してくるようになった。

物心ついた時から豊橋で育った私の知らない「豊橋カレーうどん」とは何者なのか？そして、一体いつの間にこんなにまちの人気者になったのか？

オススメの店？
知るはずがない。だって一度も食べたことはないし、そもそも豊橋名物だなんて、私は、認めていないのだから。

別に食べないでいてもことさら困ることはないけれど、果たしてどんなものかと気になって、ちょっとググって見たところによれば……

- ・ 麺が自家製であること
- ・ 豊橋産のうずらたまごを使用すること
- ・ 愛情を持って作ること

など、「豊橋カレーうどん」と銘打つにはいくつかの厳密な条件があるらしい。

誕生の経緯も、盛り方、食べ方に細かなルールがあることなどもわかった。さらに、それらの条件を満たしつつ、提供する店では各々独自に趣向を凝らしたオリジナルの豊橋カレーうどんが食べられるのだという。

内心、「カレーうどんなんて、若鮎屋でも食べれるじゃん」と思っていたけれど、私のイメージするカレーうどんとはどうやらまったく別物のようだ。

しかし、ひとまずはこれで、だれかに突然、話題を振られても、豊橋人としてうんちくぐらいは語れそうだ。スマホで検索すれば写真もたくさん出てくるぞ。

しかし、困ったことにまったくわからないのが肝心のその味だ。

やはり百聞は一見にしかず。次、帰省したらこっそり食へに行くか。

故郷とは、離れて暮らす自分にとっていつまでも変わらない……できればあまり変わらないでいてほしい存在。けれども、おいしいこと、楽しいこと、魅力が増えていくのはそれ以上にすばらしいことである。



まちを歌う

大林 正智

「豊橋市歌の歌詞にもあるじゃん、〇〇って…」と、他でもない豊橋ライターズのミーティングで言われるまで意識になかった、存在することすら知らなかった豊橋市歌。確かに、市のホームページで聴くことができます。

市制施行50周年のときに、ということは1956年につくられたわけですね。ほほー。

丸山薫さん補詩、古閑裕而さん作曲。

「躍進の産業都」「繁栄の商業都」「あこがれの観光都」ということですが、60年経った今、どうでしょうね…。

インターネット以外でも少し調べてみよう、と中央図書館に行ってみました。

豊橋市歌が載ってそうな本は……と。『豊橋の歌』、これはいいですね。市歌の他にもたくさん、豊橋に関する

歌が載っています。

この、いろいろなところから情報を集めてコピーしたような本は、豊橋市図書館がつくったものようです。図書館は一般に売っている本を集めるだけでなく、本をつくったりもしているんですね。

この本によると、現在の市歌の前に、別の市歌があったようです。作詞者のクレジットは見つけられなかったけれど「常盤の森の朝風に 薫る十八連隊旗」とありますので、そういう時代ということはわかります（『豊橋百科事典』によると「靡(なび)く十八連隊旗」どっちだったんだろう?。「今橋吉田の跡承けて 今新興の意気昂し」というのもすごい。

古い歌といえば「豊橋市制実施五周年祝賀の歌」というのもあります。

1911年?! 「市制布かれて五星霜」って。

五年ぐらいで歌をつくっちゃうというはしゃぎぶりが微笑ましい。「戸数一万五千あり」と戸数を誇ってしまうというのも。「県下第二の大都会」。昔も今も豊橋人のアイデンティティーはこのあたりなのか…。

「まちの歌をつくる」「まちを歌う」ってのは、かなり「はしゃいじゃってる」行為なのか、と思えます。そして豊橋人、もっとはしゃいじゃってもいいんじゃない？とも。

古い歌を聴き継ぎ歌い継ぎ、新しい歌もつくって歌って、はしゃぎ続けていけたら面白いんじゃないかな。そして、市制110周年には間に合わなかったけど、120周年には豊橋ライターズが次の豊橋市歌をつくってたりして?!

参考資料

- 『豊橋の歌』豊橋市図書館 1997
『豊橋百科事典』豊橋市文化市民部文化課 2006



新・城下町づくりは 夢か 幻か

真崎 庄次郎



今年は台風が多い しかも強烈だ
大自然は なぜ こんなに怒鳴り続けるのか

何か 悟って 教えようとしているのか
台風24号が去った朝
吉田城址・豊橋公園に行ってみた

やっぱりここもやられている。 厳しいな
足元に 大きめの松の枝…… 拾った
さて どこに置いておこうか
まだ あっちにもこっちにもある 少し集めてみよう
二時間足らずで 大小の松枝の山が十盛りほど出来た
我ながら おかしなことやったもんだ

20人ほどの人が通り過ぎて行った
一人のご婦人が「私もお手伝いしましょうか」
と 声をかけてくれた。
「いえ もう そろそろ……」
照れくさかった。
もう ここらへんでよかろうかい。

聞くところによると
豊橋公園内に アリーナ建設計画があるらしい
面白いニュースじゃないか どんなのできるのかな

光陰矢の如しだけど 何時できるのかな

まっ 「伝言ゲーム」は人に任せて ところで「休み
古城にひとり」「白昼夢」 松風さわぐ吉田城だ

夢の中……

新装なった豊橋アリーナ

地元チーム優勝 興奮覚めやらぬままの帰り道

新アリーナ竣工に合わせて

吉田城址が整備されている

冠木御門を通過して 復元なった南御多門と石垣

さすが池田輝政続百名城 堂々としている 苔もい

ちよつと緊張 背筋が伸びる

いざ入城 さらに奥へ

豊川沿いには川手櫓

外見は櫓だが中はレストラン

三河の山海珍味でのおもてなし

窓越しには金色島と大駐車場

遠くには石巻山 いい眺めだ

地元の人 観光客 外国人もいる にぎやかだ
「いいじゃん！」「ベリーグッド」「そだねー！」
で 目が覚めた

みんなが集まる町―豊橋

長生きすれば いいことある。

豊橋筆メモリー

大川 朝子

二川の町を散歩した。

「本陣」を通り過ぎ、商家「駒屋」に立ち寄った際に、思わず豊橋筆とレモン柏餅を買ってしまった。

「広報とよはし平成30年6月号」に豊橋筆について書かれている。

豊橋筆の起源は、江戸時代の文化元年（1804年）京都の筆師・鈴木甚左衛門が、吉田藩に迎えられて製造したのが始まりといわれている。幕末に吉田藩の財政が苦しくなり、藩士たちが内職として、手に入りやすかったタヌキやイタチなどの毛を使い、下級武士の副業として広まった。

昭和51年には伝統的工芸品として指定を受け、現在、生産本数は全国2位、高級品の分野では生産数量・金額ともに7割を占めるそうだ。いまでも伝統工芸士の職人たちが技法を守り続けている。

筆は墨の含みをよくする毛揉み、練り混ぜ、化粧毛を芯に巻き付ける上毛（うわげ）かけ、毛を一つにまとめる尾締め工程を経て作られる。特に練り混ぜは、種類や長さの違う毛を組み合わせ、広げては折りたたむ作業を何度も繰り返しながら、むらがないように混ぜ合わせる。これは豊橋筆独特の工程で、高い品質を保つ秘訣の一つだそうだ。さらに、筆は分業制で作られることが多いが、豊橋筆は全工程を一人で行っている。

私にも筆についての思い出がある。

中学で書道部に入ると、父から「夏休みにこれを書き写したらどうだ」と「欧陽詢」の写本を渡され、和綴にした。習字三昧の夏休みだった。

職場に、父親が豊橋筆の筆職人で、高校生の頃その父親を亡くした人がいた。

「親戚のおじさんに、お父さんが作った筆はいいものよと言われてね。娘たちに大事に残しておこうと思うのよ。」
と彼女は言った。

「気持ちはいくわかるけど、おじいちゃんに会ったことがない娘さんたちに残すより、お父さんが作った筆なら、書が得意なご自分が使ってあげる方が、お父さんの筆が活きると思う。」
と話したことを思い出した。

息子が生まれたとき、産毛で筆を作った。

上の子は店に連れて行って作ったが、下の子は家で刈った産毛を製筆工房に持って行き作ってもらった。親の都合で兄弟の扱いが異なってしまったが、元気な優しい子に育ってほしいという思いは同じだ。

また、子育てが落ち着いた頃に、絵を習いに行った。はがきや画仙紙、筆も面相筆や太筆、自分で竹や割り箸を小刀で切って作ったペンを使って描いたり、何に描いても、何を使っても、水彩でも墨でも自由だったので、最初は戸惑ったが気後れせず楽しめた。

先生から「筆はいい物を使うと、筆の運びが違う」と教えていただいたので、さっそく「高誠堂」でイタチの毛でできた豊橋筆を求めたが、腰があり、使い心地が良く、下手でも少しは絵がマシになった気がしたものだ。

退職して時間ができたので、また絵や書を楽しむことができる。
絵の腕前は上達しないままだが、先日購入したこの筆で何を書こうか。
ぼちぼち般若心経かな。



子どもの産毛で作った筆

高誠堂で購入した筆

駒屋で購入した筆（太筆）

同右（細筆）

「アカウミガメとの出会い」

山崎 敏乃



豊橋の表浜海岸には、毎年5月～8月にかけてアカウミガメが産卵のため上陸します。皆さんは、アカウミガメが表浜海岸に上陸することをご存知でしたか？正直言って、わたしは、2005年の市の広報で知りました。えっ！あの「浦島太郎」の昔話に出てくる水族館に
いるカメ？……

実を言うと、その頃のわたしは、心に闇を抱え、その闇から逃げ出そうともがいていました。

「ウミガメって広い海の中で、何を考え、何を求めて泳いでいるのだろう」と考えているうちに、ウミガメに会ってみたいと思いました。

そこで、市で募集していた「竜宮探検」に参加し、実際に、深夜の表浜海岸を歩き、ウミガメの探索をおこなっていました。

真夜中の海は、静かでとても広く、少し不気味な感じがします。ところが、深夜だと言うのに海岸では、キャンプファイヤーや花火などで、大騒ぎをしている人達があります。

「騒がしいと、ウミガメは怖がり上陸しないんだよ！
静かな環境でないと産卵せんからね！」と調査員の方が

おっしゃっていました。それを聞いて、わたしは表浜の環境のことを考えました。そして、わたしで役に立つならと、10年前から、調査員としてウミガメの上陸・産卵の保護活動や、海岸のゴミ拾い等に積極的に参加しています。

ところで、わたしの心の闇はと言うと、子ガメが産まれたとき、穴から海に帰っていく姿を見たときの生命力、何十年も深い海の中をひたすら旅し、これからは自分だけで生きていかなければならないと自覚する子ガメたちの覚悟に、わたしも強く生きなければいけないと勇気と力をもらいました。

さて、わたしたち調査員は、愛知県から特別な許可をもらってウミガメの保護活動をおこなっています。もし、海岸でアカウミガメを発見しましたら大声を出したりしないで、静かに見守ってください。

甘党トキワと裸の交流

長坂 なおと

平成30年9月29日、豊橋の銘店「甘党トキワ」が、多くの豊橋っこに惜しまれ、閉店しました。中日新聞によると、なんと江戸時代末期から150年という老舗でした。

150年に比べたら、私と甘党トキワの関係はとて短い。6年前に「豊橋まちなかお店マップ」を制作した際、掲載のご確認に行ったのが、ほとんど初めてのご縁。そして、アンケートから多くの方に愛されているお店と知りました。

「ソフトクリームは素から作っているらしく、濃厚です。(女性30代)」

「自家製あんこ生地の大判焼き本当においしい。夏はやっていないのが残念。(女性40代)」

「長年同じ味で安心するお店。

こういうお店は絶対なくならないでほしい!!

部活帰りに寄るべし!(女性50代)」

その後、ひよんなことから、トキワ大将との交流を深めることに。

平成26年11月、ご近所の銭湯「菊乃湯」が閉店することとなりました。最後の1か月「銭湯会議」と称して、友人らと足繁く通いました。その「菊乃湯」の上客に、トキワの大将がいらっしやった。

ここから「裸の付き合い」が始まりました。菊乃湯の閉店に際し、脱衣所でいっしょに記念写真も撮りました。

それから4年、いま再びの交流を、と、トキワ大将から今通っているとお聞きした銭湯へ。……いた!

トキワ閉店を知らせる貼り紙には、(店主健康上のため)と書いてあったので、心配するように、いや、気を

遣うように声をかけてみると、大将からは意外な言葉が。

「国の借金をなんとかせんと」

閉店直前というのに、大将の見ている先とその大きさ、一方の自分の慮りの小ささに、申し訳なくなるやら、恥ずかしくなるやら。しかしながら、こんな風に心配くださる大先輩が豊橋にいること、ありがたく思いました。

もしかしてぼくたちは、未来を憂う先輩たちの思いを勘違いし、付度し、借金を増やしているのかもしれない。大将、ありがとうございます。

これからお元気で。



つれづれなるままに、
豊橋のいいところを考えていたら、
妙におかしな気分になってきた。

桑原 裕明



ふいに、未来に遺したい「豊橋遺産」を見つけよう！と
言われても、つい「豊橋って何もないよね」と答えてし
まう自分にとっては、難易度の高い問いかけだ。

身近すぎて気がつかない「豊橋のいいところ、他には
ないもの」……。これが実はたくさんありすぎて、何か
一つに絞り込むのは難しい。

このことが、「豊橋って何もないよね」につながって
しまっているはずで、バランスを好む豊橋人にとって、
ナンバーワンを決めるのは苦手な作業なのだ。

こんなことなら、去年、94歳で亡くなった祖母に、
豊橋の一番を聞いておけばよかった。遠く故郷の能登を
離れ、豊橋で人生を全うした祖母の目に、この街の景色
はどう映っていたのだろう。今更ながらに思うのだ。

植田の大まんじゅう、スマートボールのアサクラ、ソ
フトクリームのときわ、ハンバーグのじゃるだん……。
豊橋人なら誰もが知っている、そんな豊橋遺産な名店が、
前触れもなく、平成最後に駆け込むようにして暖簾を下
ろしてしまった。

もっと足を運んでおけばよかった、と名残惜しむのは、
人付き合いと同じなのかもしれない。

かくてもあられけるよ。それでも、生きていけるのだ。

忘却曲線を辿ることに抗いながらも消えていく寂しさは、きつと新しい出会いや思い出を連れてくる。

神無月のころ、跡形もなくなつた名豊ビルは、まちなか図書館の入る、キラキラで立派な高層ビルに生まれ変わるらしい。その頃には新しい元号もすっかり世の中に定着し、新たな豊橋の定番もたくさん生まれていることだろう。

そんなこんなで、くだんの豊橋遺産について心に浮かんでは消えるいろんなことをとりとめもなく書きつけてみると、何とも言えずセンチメンタルに陥ってしまうので、あれこれ想像しては、どうにか面白おかしくしたいのだ。

「お互いさま」で支え合える町になるといいな

丹下 佳子



「困ったときはお互いさま」を合言葉に、ちょっとした困りごとを、地域の中で支え合う活動をしている三本木町お互いさまの会。

自治会に加入していれば誰でも、手伝ってくれる人1人あたり30分につき100円の料金で「お互いさまの会」にお手伝いを頼めます。100円は、無料にすると頼みにくいだろうと設定しました。

自宅の庭の手入れが困難になった高齢者世帯からの「草取り、枝はらい」が最も多いお手伝い。見ているだけで気がめいりそうに伸びた雑草を、会員が協力して取りきると、「庭がキレイになり、すがすがしい気分になる。ほんとうにありがたい」と依頼者は笑顔に。手伝った会員も「自分もいつ、誰かのお世話になるかわからない。だから、お手伝いできるいまのうちに、させていだいている」と話します。

会員は、現在120人あまり。会ではお手伝い活動以外にも、連絡を受ける用の携帯電話代や道具などを購入するために、資源回収や公園清掃も行っています。資源回収は20代の若者も手伝ってくれ、公園清掃には小学生のお子さんと参加される家族の姿があります。若者やお子さんが手伝ってくれる姿を見ると、この町の未来に希望がもてます。

私も平成21年の立ち上げ時から会員になり10年、「できることをできるだけ」の気持ちで活動しています。ちよつとした困りごとを地域で助け合う活動の輪が広がる。そんな「ちよつと」が集まって、みんなが気持ちよく暮らせる町ができればいいな。

母の働くところ

小倉 摩美

照明はちょっと薄暗いし、新しいオフィスビルのような煌びやかさも無い。お世辞にも「素敵な場所」とは言い難いけれど、わたしには不思議と落ち着く空間だ。

わたしが小さい頃、実家の母はビル清掃の仕事しながら家計を支えていた。連れられて一緒に行くことがあったけれど、何をどうして過ごしていたのか記憶はない。ぼんやりと覚えているのは、薄暗くて独特のニオイのする空間と働く母の背中。

結婚して家を出て、豊橋へ来た。

子どもが生まれ、自営業をはじめた。

古い商業ビルの奥にある共同事務所を借りた。

明るい通りから一歩ビルの中に入ると、仕事モードのスイッチが入る。この不思議と落ち着く空間はわたしにとって「働く母」の場所だ。

今では時々、あの頃のわたしと同じ年ごろになった娘を連れて通っている。

(ユメックスビル…愛知県豊橋市広小路1-18)



古い商業ビルに入ると、酒と煙草の混ざったニオイが鼻につく。

ステアレース

西尾 祥一

はあ……、はあ……。

息が切れる。

道のりは約半分。まだまだ頂上には程遠い。
疲れすぎて視線が下がってしまう。

スタート地点の歓声は、今はもう聞こえない。

乳酸はマックスに両脚に溜まっている。足が上がらない。まるで足かせを掛けられているようだ。

心臓は通常の倍以上のビートを刻んで胸の辺りで暴れている。担ぐ荷の重さが肩に食い込む。

(ああ……、苦しい……。何でこんなことやってんだろう……。) って本気で考える。

きっかけは先輩の誘いだった。

「ちよつとこれチャレンジしようぜ！」と声を掛けられた。

付き合いの良い僕はこれに賛同。

本番までは約3ヶ月間の時間がある。自転車や山登りを繰り返して練習を積んできた。

だから、もう一踏ん張り！

動け！ 両脚！

止まったら動けなくなりそうだ。

手すりを握った手に力を込めて全身を使って前に進む。

この塔に入ってから、階段を登り、少しばかりの渡り廊下を進み、また階段を登るといふ過程を何度繰り返しているのだろう。

もうダメかと思ったところで、上から声が聞こえてきた。

「あと少しだ！頑張れ！」

上を見るとゴール地点が見えた。多くのカメラを持った人たちが、こちらを向いて声を掛けてくれている。

全身に力が戻ってくる。

最後の階段を目の前に、乳酸の溜まりきった足が自然と前が出る。

残り20段!

グッと踏ん張って僕は進む。

最後の1段を登り切って僕の40歳前のチャレンジは終わった。

ステアレース。

会場は豊橋動植物公園のんほいパークの展望塔である。

ルールはいたってシンプル。

スタート地点は展望塔前のカナル横の園路となる。スタートに先立って、選手は重し(今年は、20kgの人形だった。)を担ぐこととなる。その重しを担いで、20m先のコーンを回って園路往復40mをダッシュする。

スタート地点に戻ってきたら、担いでいる荷を下ろす。そして、島田巻きという放水用のホースを2本連結したものを蛇腹状に折りたたんでバンドで固定したものを担ぎ直すのだ。重さは約15kg。

これを担いで、展望塔に駆け込んで行く。展望塔の普段は通れない螺旋階段276段を駆け上がりゴールを

目指すのである。

そうこれは、市民の暮らしを守る消防士、警察官、自衛隊員、消防団員の精鋭たちが自分たちのプライドを賭けて競い合う高尚なレースなのだ。

なんて聞こえはいいけど、正直DMな人が集まる筋肉を喜ばす自虐レースなのである。



夜の豊橋散歩

吉川 広道



単身赴任で豊橋に来てから、毎晩散歩を兼ねて散歩をしています。

気が付くと3年。

昼間だと気付くことのない夜ならではの豊橋の魅力。どこか私の生まれ故郷の石川県に似ている懐かしさもあ

り、親近感が湧くようになりました。

この土地ならではの新たな発見が、今の私の豊橋での生活をわくわくさせてくれるものと変化していきま

私が散歩しているコースは、主に下地からライトアップされた吉田城を左手に見ながら吉田大橋を渡り、路面電車が通り過ぎるのを横目に広小路通りに入り、豊橋駅に向かいます。西駅界隈を折り返して、帰りは吉田神社の前を通過して下地まで戻って来る、約1時間のコースとなります。

吉田城、路面電車、広小路通り、豊橋駅、吉田神社といった豊橋の歴史を散歩を通して感じています。

今この瞬間も豊橋の歴史は続いている時間軸を体感しているのかも知れません。特に豊橋駅2階ペDESTリアンデッキから見た駅前大通りの夜の景色は格別に心が和みます。

とても素晴らしいです！

実はこの夜の散歩を毎日し続けてふと感じることがあります。それは、毎日見慣れた散歩コースの景色がいつの間にか私の生活の中で普通に存在していることです。

私は豊橋が大好きになりました(´▽`)/。

『どうやら、豊橋の夜が活気を
取り戻しつつあるようですねぇ♪』

松野 公秀



「豊橋の好きなどころは何か？」と聞かれたならば、
私は真っ先に『酒場』と答えます。

豊橋には、美味しいカクテルや珍しいウイスキーを
始め、地酒やワイン、そして他では味わえないような

数々の魅力的な料理を提供してくれるお店が沢山ある
からです。

もちろん、一方で「豊橋には魅力的な店が少ない」と
いう意見があることは知っています。かく言う私も「豊
橋なんて、都会ぶった田舎じゃないか」と擦れていた時
期もありました。

しかし、大人になってしばらくして、豊橋にある数々
のバーや居酒屋に足繁く通い、そこで出される美味し
いお酒や料理が喉を通るたび、私の心の中に豊橋に対
する郷土愛が徐々に芽生え、膨らんで行ったのです：
：お腹の脂肪と共に。

さて、私は『酒』と『外食』という二つの贅沢を一挙
に提供する呑み屋街の賑わいを見る事が、地域経済の
潤いを計る上で重要な指標の一つとなりうると考えて
います。

なぜならば、財布の紐が緩めば、人の心は外へと向う
傾向があるからです(中には、私のように金がないクセ
に外で呑み食いをする人もいますが、これは例外)。

肌感覚と言われればそれまでですが、少なくとも、こ

こ数年で街を歩く人の数は徐々に増えて来た印象を私は抱いています。

5年ほど前など、飲食店にとっては稼ぎ時であるはずの金曜日から土曜日にかけてでさえ人通りが少なく、まさに「街が死んでいる」と形容されても仕方のない様相でしたが、翻って、昨今は平日の夜でも人が街に出ているのです。

休日ともなると、豊橋駅周辺の駐車場が満車の日も増え、他の地域では珍しい魅力的な料理を出す店舗も、確実に増えています。

確かに、豊橋市が策定した第二期豊橋市中心市街地活性化基本計画の12項から13項(期間 平成26年4月～平成31年3月)によれば、街中を歩く人の数はむしろ減っていますが、これは午前11時～午後5時までのデータであり、駅周辺の飲食店が開店する午後5時以降のデータは含まれていません。

豊橋の本気は、むしろこの時間帯からだと思っていますので、今後は、5時以降の統計調査が進む事に期待したいですね。

地元に住んでいると、その良さに中々気づきにくいものですが、私は魅力ある酒場に溢れているこの豊橋が大好きです。昨今の夜の街中の賑わいを見るに、豊橋にはまだまだ地力があると自信を持って良いのではないのでしょうか？

自信が成長への原動力となるのは、人も地域も同じと考えます。

地域もまた、人の集まりなのですから。

路地

河合 鉄夫

ここが不思議の国なら、小学校の卒業式を終えたばかりの私は、アリスよろしくその路地に入りこんだかもしれない。ところが、現実の世界にはベストを来てポケットから懐中時計を取り出し人間の言葉をしゃべる白ウサギなどいるはずもなかった。

おかげで、私はタバコ屋の角から奥に伸びる路地に50年の間一度も入り込むことが無かったのだ。私にとって垣根の下の穴よりも狭い路地に。

観劇を終えてプラットを飛び出した私は、少し早めの夕食にありつくために競歩の選手となっていた。

幕が降りかかった時に席を立ったのは、フライングだったかもしれない。しかし、ビールと飯で腹を一杯にしてやらないと気が収まらない劇だった。

駅前の歩行者用信号の数字が5秒単位で減っていく。

私はこの信号で、赤い数字の減り方は緑の数字の減り方より遅いという法則を発見していたが、今日は、この赤い数字が私の右足の貧乏ゆすりを誘発するという新事実を発見した。

緑色の数字に追い立てられるように一步目を踏み出した私はそのまま歩を左に取り、いつものようにタバコ屋の角の路地には気を留めず、コンビニの前から豊栄ビル↓広小路通り↓常盤通りに向かおうとしていた。いつものように……。

初めて一人で豊橋に来た3月末までは中学生ではない私は、バスを降りてから来月使う参考書を買うため本屋に行く途中でその路地の前を通ったと思うのだが、出口が見通せず大人が行く店の看板が出ているその路地は、18禁の道に見えた。結局、その日の私は、こども料金の交通費を使っただけで家に帰った。

それから半世紀、歩きも歩き、市電やバスにも乗り、車で営業に回っていた時期もあった。豊橋市内のどこに何があるか、知っている自信があった。

郊外に道が整備され、建物が立ち、取引先の会社が増

え、昼飯を食う店が開店し、さぼるのに都合のいい鼠兎の喫茶店は10ヶ所以上あった。車で豊橋市内を移動することが増えた私は、表通り沿いには詳しくなつたが、反面、入り難い裏道や豊橋駅周辺の路地など、全く足を踏み入れることが無かつた。

いつも通る道は、グーグルアースの様に頭に焼き付いているのに、その路地の奥は、Wi-Fiを受信できずに真っ白のままフリーズしている。

小学生の時とは違い、私の頭には白いものがずいぶん目立つ。こんな身近に白ウサギがいるなんて。こうなったら、今日はこの路地に迷い込んで店を探してやろう。

良い店が見つかりますように。

豊橋ライターズ 著者一覧

山下 智江子

柿本 容子

谷 亜由子

大林 正智

真崎 庄次郎

大川 朝子

山崎 敏乃

長坂 なおと

桑原 裕明

丹下 桂子

小倉 摩美

西尾 祥一

吉川 広道


松野 公秀

河合 鉄夫

とよはしのシチズンシップ

ショートエッセイ

2018-2019



2019年3月 発行

豊橋市 都市計画部 まちなか図書館整備推進室
〒440-0897 豊橋市松葉町2-10

* 問合せ 2019年4月以降

豊橋市 文化・スポーツ部 まちなか図書館開館準備室

〒441-8025 豊橋市羽根井町4-8

TEL 0532-21-8181

machitosho@city.toyohashi.lg.jp

豊橋ライターズ

まちに関心を寄せる市民が、まちへの想いを表現したり、表現の技術を学びあう大人の部活動「豊橋ライターズ」。

全員に共通しているのは「豊橋が気になっちゃう」という郷土愛と好奇心。写真、イラスト、デザイン、何でも……。得意なことを持ち寄って、わが町・豊橋の魅力を生き生きと発信していけたら素敵です。

これから取材にかこつけて、見たいもの、聞きたいこと、行きたいところへ、みんなでどンドン、ぐいぐいと切り込んでいくのが楽しみです！
